

令和7年度「品川区学力定着度調査」の結果から 明らかになった課題と学力向上に向けた取組

「品川区学力定着度調査」の趣旨

- (1)学習指導要領に示された教科の目標や内容の実現状況を把握し、教育課程や指導方法等に関わる区の課題を明確にすることで、その充実・改善を図るとともに、区の教育施策に生かす。
- (2)各学校は、教育課程や指導方法に関わる自校の課題・解決策を明確にするとともに、調査結果を経年で把握することで、児童・生徒一人一人の学力の向上を図る。
- (3)区民に対し、区立学校における児童・生徒の学力等の状況について、広く理解を求める。

1 調査日 令和7年4月15日（火）

2 調査対象 品川区立学校 第2～9学年の全児童・生徒

3 調査内容

教科に関する調査

→ 調査の趣旨に基づき、学習指導要領に定める内容について、基礎・基本および活用の力を測る問題で構成

<第2・3学年> 国語、算数

<第4～5学年> 国語、社会、算数、理科

<第6学年> 国語、社会、算数、理科、英語

<第7～9学年> 国語、社会、数学、理科、英語

国語科

1、定着状況についての概要

全学年において基礎・活用、共に目標値を上回っており、学習内容は概ね身に付いていると言える。しかし、漢字や文法事項など、知識の定着において課題が見られる学年もある。日常的に既習事項を意識させる指導を今後も続けていく。また、「書くこと」の問題において無回答の割合が多くなる傾向にある。作文の機会を多く設定したり、必要な観点を明確にしたりして、書くことへの抵抗がなくなるよう指導していく。

2、各学年における主な課題と課題解決のための方策

	課題	課題解決のための方策
2年	基礎・活用ともに、区平均及び全国平均を上回っている。しかし、「文章を書く」において、経験したことから書くことを見付けて文章を書いたり、自分の思いや考えが明確になるように書いたりすることに課題が見られる。	定型文を真似して文章を書いたり、日々の学習感想を書いたりすることを通して、文章を書くことに慣れていくようにする。日頃から、既習の漢字を用いることや、助詞を正しく使うことを意識させる。
3年	文章の読み取りや文章を書くことに対しては、すべての項目で平均と同程度または上回っている結果となった。しかし、漢字の読み書きや語彙に関しては、平均より下回り、課題が見られる。	既習漢字を覚えきれていないため繰り返しの練習が必要である。また、文章を書く際にできるだけ漢字を使用したり学習した言葉を使ったりし、日常的に使う機会を増やす。
4年	ほとんどの項目で目標値に対し、同程度または上回っているが、言葉の学習「主語と述語の関係」については目標値より下回っている。また、文章を書く問題では、無回答率が15%と他の項目に比べて高くなっている。	言葉の学習に関しては、一度の学習ではなく、その都度繰り返し行い、日常的に使用する場面を増やすようにしていく。書くことに関しては、実際に書く活動を繰り返し取り入れ、自分の考え、理由を明確に書けるようにする。
5年	全ての項目において目標値等は大幅に上回っている。しかし、「書くこと」領域の「調べたことをもとに文章を書く」問題では、正答率が低く、無回答が多かった。また、「言葉の学習」の文法に関する問題で誤答が多く、課題が見られる。	説明文の読み取りにおいては、段落の役割や段落相互の関係に注目して構成を捉えられるよう、さらに指導を重ねる。また、記述力の向上のため、様々なテーマについて指定された長さで意見文を書く活動を増やしていく。語彙力を高める指導を充実させる。漢字学習や文章中の言葉の意味調べなど、授業の中や宿題で辞書等を活用する機会を増やす。
6年	全ての項目において目標値等は大幅に上回っているが、問題の中で、敬語に関する問題の正答率が低い。また、書くことの設問の、資料から読み取ったことをまとめて書く問題では、具体的な数値を挙げていない誤答が多かった。	言語に関する事項は繰り返し練習が必要であるため、小テスト等を繰り返して定着を図る。書くことは、読む人を説得する文章を書くために必要な観点を、説明文の読みの学習の中でも明確にし、書くことに繋げていけるようにする。
7年	基礎・活用ともに、区平均及び全国平均を上回っているものの、領域別に見ると「情報の扱い方に関する事項」に、問題の内容別に見ると「漢字を書く」において課題が見られる。読むことに関して、とくに説明的な文章の読み取りは正答率が高い。また観点別に見るとどちらも約7割と比較的バランスのよい正答率となっている。	「漢字」に関しては、毎日二百字の書き取り学習と週一回のテストを行っている。引き続き工夫を凝らし、反復学習により定着を図り、意識を高めていく。「書くこと」は、条件をつけた単元の振り返りを書く活動や体験や見聞をもとに自分の考えを書く活動を設定し、書くことへの抵抗をなくすよう指導していく。
8年	すべての項目において、区平均、全国平均を上回っているが、領域別の「言葉の特徴や使い方に関する事項」や、問題の内容別に見ると「漢字を書く」において、正答率の低さが目立つ。	「言葉の特徴や使い方に関する事項」においては、授業中において、日頃から言葉の意味や用法を、ICT 機器を用いて調べることを推奨していく。また、「漢字を書く」においては、漢字の書き取りテストや漢字ワークを駆使して、漢字力の向上を図っていく。
9年	基礎・活用ともに、目標値、区平均及び全国平均を上回っている。しかし、領域別に見ると「我が国の言語文化に関する事項」において、目標値は上回っているものの、全国及び区の平均と比べて課題が見られる。	用言の活用と類義語の知識の定着に課題があると考えられる。文法事項や熟語の知識について、繰り返し知識問題を解き、学習することはもちろん、作文活動や文章を読む際など普段の学習でも知識を活用、意識できるよう指導していく。

3 次年度の数値目標

どの学年も、全ての領域で目標値を上回ることができようにする。

社会科

1、定着状況についての概要

前期課程においては、知識の確実な定着や資料の読み取りなど、基礎的な力の向上がより一層求められる結果となった。また、その知識や思考を次につなげる活用力を高めることができるよう、授業の中で重点的に読み取りの時間や活用の時間など、ねらいを定めて指導を行う必要がある。後期課程においては、目標値を下回る学年が見られた。社会的事象の意味や意義について考察したり、事象同士を関連付けたりするなどの活動を単元のまとめに取り入れ、「概念の理解」に到達する授業を目指し、どのような問題にも対応できる真の資質・能力の育成を図る。

2、各学年における主な課題と課題解決のための方策

	課題	課題解決のための方策
4年	基礎・活用ともに目標値を上回っている。しかし、内容別で見ると「工場の仕事」や「市の様子の移り変わり」問題では資料の読み取りに課題が見られた。	教師は児童に資料を活用する技能を身に付けさせるために、ねらいを達成する資料を計画的に提示し、基本的な内容や問題点を読み取る時間を十分に与える。
5年	基礎・活用ともに目標値を上回っているが、「先人の働き」など、授業で扱っていない内容では正答率が半分以下となっていた。知識はあるが、読み取りや判断など、一般化して他の資料にも活用する力が弱い。	提示された資料のみならず、自分の目的に応じて資料を選択したり、自分でまとめたりする活動を企画的に入れ、十分な読み取りの時間や活用の場を与えていく。
6年	目標値こそ上回っているが、前年度の校内正答率と比較すると、知識技能が2ポイント下がっている。また、「農業」や「工業」など、苦手とする単元が顕著である。	単元ごとに理解度にむらがあるため、単元末のまとめや、知識のおさらいなどの活動を重点的に行い、知識や思考を確実なものにしていく必要がある。
7年	「活用」の正答率は目標値より3.4ポイント上回っているのに対し「基礎」は1.4ポイント下回っている。また問題内容を見ると縄文時代～江戸時代までの正答率が低く、古代～近世の歴史的分野の内容に課題があることがわかる。	基礎・基本的な知識は授業の中で繰り返し扱うようにし、その事象の意味や意義を生徒が説明する活動を取り入れる。また、古代から近世までの歴史について、各時代の特色を大観する学習を行い、我が国の歴史の大きな流れを捉えられるようにする。
8年	全体としては目標値を上回っているが、歴史分野に関してはそれぞれの時代区分において目標値を下回っており、分野全体が課題として挙げられる。	これからの歴史的分野の学習意欲をさらに高めさせ、各授業や家庭での学習、日野学タイムでのプリント学習などを活用し、繰り返し学習を行う。
9年	基礎・活用とも目標値、区平均正答率、全国平均正答率を上回っている。問題の内容別正答率は「明治時代」のみが目標値、区・全国平均正答率を下回っており、近代の内容の定着に課題が見られる。	歴史学習において時代の転換点や鍵となる出来事について、因果関係を生徒に押さえさせる。さらに、歴史的な事象を生徒自身が関連付けたり、意義付けたりすることで、概念の理解を促す活動を授業の中にさらに取り入れていく。

3 次年度の数値目標

どの学年も、全ての領域で目標値を上回ることができるようにする。

算数・数学科

1、定着状況についての概要

学年が上がるにつれ目標値、全国平均を上回る結果になっている。低学年のうちから基礎的な学習を繰り返していくうちに基礎基本が固まり、応用や活用ができるようになってきている。前期課程では基礎的な計算能力を定着させ、具体的な実測方法、図や表を使って計算の意味や説明する能力を身につけさせ、後期課程では前期課程での基礎を使って必要な情報を正しく読み取り活用できるよう、系統性を見据えて指導する。

2、各学年における主な課題と課題解決のための方策

	課題	課題解決のための方策
2年	基礎の問題で全国平均を下回っている。特に「数と計算」の領域に課題が見られ、位取り記数法や100までの数の系列、時計の読み取り等の基礎的な理解を問う問題の正答率が低い。また、活用問題の適切な文章問題作りにおいても、正答率が全国平均を下回っている。	基礎的な計算練習と合わせて、100までの数の構成や系列の理解を確実にするための学習や復習に重点を置く。繰り上がりや繰り下がり計算の習熟に必要な10までの数の構成も繰り返し練習して全員が十分に定着できるようにする。数の構成や系列、位取り記数法の理解を深め、題意を読み取って適切に解答する力を伸ばす。
3年	基礎的な計算はできているものの、全体的に全国、区内の平均を下回っている。計算問題では繰り下がりが2回出てくる問題で課題が見られる。また、「測定」の目盛りの読み方や基になる数から考える問題に課題が見られる。	基礎的な計算能力を伸ばすため前年度までの計算問題を繰り返し計算能力の土台を固めていく。また測定や図形などは個別指導を行い、つまづきを解消していく。計算の工夫では考えを聞くだけではなく、自分の考えを説明できる力をつけ計算の意味を理解させていく。
4年	全体的に区の平均、全国の平均を上回っている。特に「数と計算」ではすべて全国、区内平均を上回っており、定着していることがわかる。一方「図形」の作図問題や「四則計算の意味」を問われている問題では平均値を下回っている。	実測や計算の意味を考える際に、自分のやり方や考え方が見だせていないことに課題が見られる。やり方や計算の工夫などを友達に説明する機会を増やし内容を理解して自分で活用できる力をつけさせていく。また、作図など実技を伴うものは繰り返し練習して定着させていく。
5年	区の平均も全国の平均も上回っている。内容別では「億と兆・概数の表し方」「分数」「いろいろな形」については、区の平均を下回っており、特に概数に対応する数の範囲の理解やひし型の作図を身に付けることに課題がある。	「百の位までの概数に」なのか「百の位を四捨五入」のかなど、問題文を正しく読みとることの練習を繰り返す。作図の正しいかき方をひし型に限らず授業内で繰り返し行うこととする。
6年	基礎・活用ともに、目標値、全国平均を上回っている。しかし、図から立式を考える問題や与えられた情報から読み取る問題、自分の考えを説明する問題では正答率が低く、無回答が多かった。	図から立式を考える問題では、普段の授業から立式をする際に図を書いて考えたり友達に説明したりする機会を増やし、計算能力だけではなく思考を深める学習を展開していく。
7年	数と計算、図形、変化と関係の領域では全国平均を上回ることができた。しかしデータの活用では全国平均を下回ってしまった。代表値や度数分布表の理解が課題と言える。	データの活用は3学期に授業を実施する。前期課程の知識の復習から始め、基礎基本の定着を図る。また、代表値や度数分布表の良さを実感するための数学的な活動も取り入れていく。
8年	全ての領域で全国の平均値を上回ることができた。目標値を下回った設問が2つあり、その1つが「データの分析と傾向」の内容で、これは前年度も比較的できていなかった内容である。資料から正しく読み取ることが課題と言える。	データの活用は7学年の3学期に“既存のデータを活用して考察できる”という授業を行ったが、今後とも身近なデータから自分たちで分析して考察していく経験を積み重ねていく。
9年	全ての領域で全国の平均値を上回ることができた。目標値を下回った設問は1つもなかったが、図形の内容の定着度が高くはなかった。角の性質等の基本を理解し、それらを活用していくところが課題と言える。	2学期に図形の単元を学習する際に、既習事項を復習すると共に関連性について考えるように指導する。また、図示を丁寧に行い直感的な理解を促すことも良し聞いていく。

3 次年度の数値目標

どの学年も、全ての領域で目標値を上回ることができるようにする。

理科

1、定着状況についての概要

全ての学年で、正答率は目標値と同程度であり、概ね学習内容は身に付いていると考えられる。学年によっては「思考・判断・表現」が目標値に対して有意な差をもって上回っていたり、「知識・技能」が下回ったりしているが、観点ごとの学校全体としての傾向の特徴は見られない。

内容面では、「方位磁針の使い方」といった技能に課題が見られる傾向がある。今後の学習においても繰り返し使用するものが多いので、学習前に取り立てて復習の機会を設定する必要がある。

2、各学年における主な課題と課題解決のための方策

	課題	課題解決のための方策
4年	平均正答率は目標値と同程度である。基礎・活用の観点でも差は見られない。内容別に見ると、「太陽と地面の様子」「磁石の性質」に課題があり、特に「太陽と地面の様子」は有意な差をもって目標値を下回っている。	「太陽と地面の様子」は特に方位磁針の使い方の正答率が低かった。4年生の「星や月の動き」など今後も方位磁針を使用する場面が多くあるので、使い方を確認し、実体験の中で定着できるようにする。「磁石の性質」は活用問題に課題があった。どの単元でも問題解決の過程を通して学び、実験結果の分析(考察)の経験を積ませていく。
5年	区の平均も全国の平均も上回っている。しかし「天気のようにすと気温」「1年間の動物のようす」の小問に課題が見られた。中でも「気温のはかり方を正しく身に付けること」や「カエルの1年間を通した活動のようすについて理解すること」が下回っている。	「天気のようにすと気温」では特に温度計の扱い方に課題があるため、他の単元においても温度計の扱いについて学習を繰り返していく。「カエルの1年間のようす」では、極力実際の飼育活動を通し、授業内で理解を深めさせていく。
6年	平均正答率は目標値と同程度である。基礎・活用の観点でも差は見られない。内容別に見ると、「流れる水の働き」「ふりこのきまり」に課題があり、特に「ふりこのきまり」は有意な差をもって目標値を下回っている。	「流れる水の働き」については、6年生2学期の「地層のでき方」の学習に内容の関連があるので、意図的な復習の機会を設ける。「ふりこ」については対照実験の設定に課題があった。6年生2学期の「てこ」の学習を中心とし、比較の考え方を使得って自分で実験を計画する場を設定する。
7年	「気体検知管の使い方」や「実験の安全な進め方」のように実験の基本的な操作については区と全国の平均正答率を上回っている。しかし、その他の大部分が目標値や区・全国の平均正答率を下回っており、理解が不十分であった。	理解が不十分であった「大地のつくりと変化」については、地学分野の学習内容と関連しているので、意図的に復習の場を設定する。また、授業の中で前時までの復習を実施したり、映像の活用などを取り入れる視覚的な理解を促したりするなど、知識の定着を図る。
8年	平均正答率は目標値を上回ることができた。「地層」や「地震」についての正答率が低かった。マグニチュードと最大震度・ゆれが伝わる範囲の広さに関する説明や、地震速報のしくみをもとに震源距離を推測といった内容への理解が不十分であった。	映像の活用や、調べ学習などの活動を取り入れることで知識の定着を図る。また、授業の中では前時の復習、日野学タイムでは小単元の復習や小テストを実施する。
9年	化学変化のうち、発熱反応についての理解が不足していた。電磁誘導の応用として変圧器の仕組みを十分理解していなかった。気圧の単位ヘクトパスカルが、どのくらいの圧力かの理解がきわめて不十分だった。	酸化鉄とアルミニウムの反応(テルミット反応)や変圧器といった、実際に、世の中で科学的な現象を応用している例についての理解度が低かった。応用例を調べたりする機会を増やしていく。また、圧力のように基本単位を組み合わせたものについては、求め方の習熟や定着を図っていく。

3 次年度の数値目標

どの学年も、全ての観点で目標値を上回ることができるようにする。

英語科

1、定着状況についての概要

どの学年においても、基礎・活用、共に正答率は目標値・区の平均を上回っており、学習内容は概ね身に付いている。ただ学年によっては前年度の平均を下回っているため、学年の課題を見付け、効果的な学習方法を検討する必要がある。4技能をバランスよく伸ばすために、様々な英語表現に触れることや問題形式に慣れることが必要だと思われる。

2、各学年における主な課題と課題解決のための方策

	課題	課題解決のための方策
6年	リスニング問題は、目標値・区平均を上回っている。単語の読み、英作文に関わる問題の正答率が著しく低い。	英語を音として耳で聞いたり発音したりする活動が多く、それらを文字にしたり意味を理解したりする活動が少ない。単語を入れ替えて作文したり、例文を真似して作文をしたりする活動を増やしていく。
7年	基礎知識や知識を活用する力が不足していることが考えられる。また、理解度の違いが大きいことから、学習形態の工夫が必要であると考えられる。	ペアやグループ活動を取り入れることで、英語が得意な生徒の言語使用から学べるようにする。また必要な知識を深め、英作文や発表活動を交えて活用できる場を授業で多く取り入れる。
8年	目標値・全国平均ともに上回っているが、「場面に応じて書く英作文」は、50.4%と正答率が最も低い。次に「語形・語法の知識・理解」が低く、54.0%となっている。	会話形式で練習問題を出題し、慣れさせることが必要である。三人称単数現在形や過去形などの既習事項は、パターンプラクティスや1分間トークを通して復習させたい。
9年	全項目で全国平均を上回っている。課題は長文の読み取りと、場面英作文である。	1学期に引き続き、授業の帯活動で長文読解トレーニングを行う。英作文はコミュニケーションの場面を明確に設定した課題を用い、くり返しトレーニングを行う。

3 次年度の数値目標

どの学年も、全ての領域で目標値を上回ることができるようにする。また学年関係なく、平均正答率を上げられるように取り組む。